

あるぶす越

輜越の阪落しといふと、日本の歴史の話の中で、随分名高いものですが、然し其阪落しの爲めに、義經の軍勢が何百人死んだといふこともない様で、おまけに彼の強力無双の畠山重忠などは、自分の馬を背負た儘で、その難所を越したといふことです。

奈翁のゐるぶす越といふと、世界の戦争中の最も有名な話で、なか／＼輜越などの類でなかつたといふことです。簡単に其お話をしてみませう。

あるぶす山といふのは、歐羅巴中で一番高い山でして、富士山よりかも、さつと三千尺も高い、だから年中、雪や氷で埋まつて居ます。此山は、佛蘭西の東南にあつて丁度、伊太利と佛蘭西とを界

して居るのです。

そこで、奈波列翁のお話は、諸君がもはや御存じのことゝしまして、すぐあるぶす越のことをお話します。

さて奈波列翁が、歐羅巴の方々の國を征伐して、今度はお隣りの伊太利を攻めかゝりましたが、夫にしてはどうしても、此高山を越さんければならぬ所から、千八百年の五月といふ頃に自分で軍勢を引き連れて、不意に此山を越えました、夫から四五ヶ月も経つてから、自分の方の大將に、マクドナルド將軍といふのがゐる、其將軍に命令を下して、兵一万五千人を引きつれてあるぶすを越えて、伊太利の平野で自分に出會へと傳へました。

時は此年の暮の十二月の始め、十一月の終の頃で平地ですら、も一雪で眞白く被はれて居るに、ま



して、年中雪の消えないこの高山を越すことは、
 非常な冒険であります。けれども、何しろ命令で
 すから仕方がない、途中雪の爲めに皆が埋つて死
 ぬにしても命令には従はねばなりません。そこで
 一万五千の兵どもは、マクドナルド將軍に指揮せ
 られて、此最も危険な行軍を始めました、屏風の
 様な、断岩絶壁をよちて、高い〜六千尺の峰を
 越えかゝりました。

そこで、先づ行軍の隊列を申しますと、真前には
 嚮導といつて、道
 を案内する者ども
 が、手ん手に長い
 黒い竿を持つて、
 夫を眞白な雪の中
 に打ち振り打ち振

夫を眞白な雪の中

りして道を教えて行くと次には工兵だの人足だの
が氷だの雪の塊を取り除けては道路を造つて行、
其次には、騎兵が馬に乗つて……夫も普通の馬で
は行かない、一番強い逞しい馬に乗つて、雪路を
踏み平して進む、その後には續いて、軍隊の大部分
が進軍して行きます、夫から大砲も、平地ですと、
馬に引かせて行けば、何でもないが、こゝではそ
うは行きませんらか、粗末な橋へ乗せて大勢で押
したり引いたりして行く、尤も道のよい所は牛な
どに引かせました。

一羽の鳥も飛ばない、一匹の獣も驅けない、まし
て人などの往來は愚なこと、雪はいやが上にも降
り重なつて一寸の前も見えない、天も地も暗々蒙
々たる此山道を一萬五千の兵どもは、ひた進みに
進んで行く、時々アルプス下しの吹雪が、ざーつ

と来ると全軍の眼はくらんで一歩も行けない、ま
してつき通す様な寒さで手が凍る足が腫れる、其
難澁は中々一通りや二通りのことでない。

この様にして、大方半分も上りついた頃でした。
不意に煙の間から、ゴーツといふ響が聞こえたの
で、真つ前に立つた嚮導は「スハ大變」といふの
で眞蒼になつて互に顔を見合はせました、驚いた
のも道理、かの響はだん／＼高くなつて来ると思
うと嚮導どもは、一生懸命の聲で「雪崩だ！雪崩だ
！」と叫びました。が、叫ぶが早いか、ガラガラ／＼
ガラツといふ響と共に山の様な氷と雪との塊が、
頭の上から非常な勢で崩れ落ちて来て、ズドーン
と行軍の列の真中にかぶさつたので、三十騎の騎
兵は、立ち所に拭ひ去られた。馬と乗手との黒い形
が、白い雪の中でもがいて居つたのは、ほんの暫く

で、夫もすぐと見えなくなつて仕舞ひました。

全軍は此有様に、全く避易しました、吹雪の真中に躊躇つた儘で、寒さと恐ろしさで慄えて居る今の處では、目さす敵は肉と血とでなくつて、寧ろ此猛然たる吹雪であります、此敵に向つては剣も銃鎗も何の役にも立たない、然しながら、此際退却背進なども全く望がありません、何故かといふに周圍八方十重二十重に雪で圍まれて居るから。そこで、何でも進軍せねばならない、でないといふ死ぬるに決つて居る、生き様と思つたら無闇と進みより外にない、此時、マグトナルド將軍は、馬上より大聲で、叱咤した「全軍の兵士、汝等は今伊太利から招集せられたのだ、將軍は汝等の到着を待つて居る、進んで一舉に敗れ先づ此山と此雪とを、次いで伊國の平野と敵軍とを」

全軍此に焚かれて、再び進んだ、眼は吹雪に閉ぢられ手足は寒さに凍えて、其上休む所もなしに、マグトナルドは進軍を續けました、其危険なこととは殆んど譬へるに物もない、時としては一隊の兵卒が悉皆雪にさらはれてしまつた事もあつた、其中でも、殊に憫れなのは、次の咄しです、夫は一人の鼓手が、辛うじて雪崩れの中から、這ひ出したと見えて、切りに太鼓を打つて助けを求めて居る様です、包まれた様な幽かな太鼓の音が、遙か谷底の雪中から聞える、兵卒どもは、夫と知つたが、誰も助けに行くことができない、一時間許りは、太鼓の音が忙がしく聞えて居る、其中にだん／＼弱つて行つて、遂には全く聞こえなくなりました。さて、此危険な進軍は、二週間續けられました。二百人の兵隊は、此間に雪の爲に斃れました。

このあるぶす越は、奈波烈翁の戦争の歴史の中で最も名高い一でありまして、所謂精神一到何事不成といふ格言を、よく顯はした實例であります。

いそつぶ物語

其二十七 農夫と鶴

農夫が、畑を造つて種をまくと、いつでも大勢の鶴がかたまつてやつてきて、畑を荒らして行きますから、或日網を張つて一度に、澤山な鶴をいけどりました、所が其中に一羽の鶴が居て、一本の脚を網で折られてつかまりましたが、一生懸命に命乞をします。

「御主人様、どうか助けて下さい、此通り私の脚は一本折れて居ます、可愛相じやありませんか、おまけに私は鶴じやありません、鶴と申して、實

は性質の立派な鳥です、卿、私がどれ程両親に孝行だかといふことも御存じでせう。虚とお思ひなら、一寸私の羽をむらんださい、鶴などは大變な違じやありませんか」

そうすると、農夫は大きな口を開いて笑ひ出した。

『なる程、お前のいふのは皆尤もな話だ、然し己はそんなことは知らない、たい鶴といふ盗人どもと一所にお前をいけどつたのだから、お前を鶴と一所に殺す丈のことだ』

といつてとうとう殺して仕舞ひました、「羽のある鳥は何時も一所に群れて居ます」

其二十八 山から鼠

何時でしたか、どこかの山が大變に荒れ出して、あちこちに其響き聲が聞こえたので、何事かと思